美しさを求めて生きる人生を

少年の頃の話をする。人には皆少年の頃がある。今の私にとって少年の頃は何であったかと思うことがある。何か困難にぶつかった時に、すぐ少年の頃を思い出す。その思い出が困難を乗り越えるエネルギーになる。またエネルギーになってきた。たとえば、困難にぶつかって、ずっこけるそして倒れる。その倒れ方が大きければ大きい程、跳ね起きる力も大きい。倒れ方が大きい程、大きなバネとなって、大きく立ち上がることができた。部落問題に取り組むようになったのもそうであった。

この世の中で、正しいことを貫いていくためには、間違いと闘っていかなければならない。決して間違いにはついていかない。たった一人になっても、間違いにはついていかないという抵抗の精神がいる。

小学校６年の頃であった。夕食の時に母は私に言った。「今夜は、弟二人にしか食べさせることができない。それだけのご飯しかない。」非常に貧しくて、その晩のお米がなかった。やがて、弟二人が遊び疲れて帰って来て「ご飯‥‥」と言った。食卓には二人分のご飯しか置いてない。二人の弟が言った。「お母ちゃんとお兄ちゃんは食べんの？」と言うから、小学校６年の長男である私は、とっさに、「先に済んだよ、二人で全部お食べ。」と言った。腹を空かして帰ってきた弟たちのおいしそうに食べる姿をみた時、私は自分の空腹に打ち勝つことができた心地よさをしみじみ味わった。自分のことより、人のことが先にということが、どんなに私を満足させてくれるものであるかを知った。

また、ある夜の食卓に、母が魚の煮付けを出してくれた。30センチぐらいの魚で四角に切って、頭の方が私、尻尾の方が弟。私はあまり魚が好きでなかった。その上、頭の方がおいしいという人もいるが、魚ぎらいの私には、頭の方は食べるところがあまりない。尻尾の方が欲しかった。ところが、母は弟の方を向いて、「頭の方は、お兄ちゃんだ。お兄ちゃんは頭の方だ。おまえたちは弟だから尻尾の方だ。」そう言った。

弟たちは、身のたくさんある尻尾の方を喜んで、おいしそうに食べていた。

やがて、その弟たちが大人になった時、もちろん、私も大人になっている。その時、弟たちが少年の時の頃を思い出して言った。

「『あなたは弟だから』そんな言い方で、おいしい尻尾の方を私たちにくれた。」

いつも、そうであった母の教育が、私たち兄弟を他人から見ると、とても羨ましい仲のよい兄弟にしてくれた。また、そんな母の教育が、兄弟仲よく助け合っていく生き方をさせてくれた。今も、亡くなって25年になる母に、私は感謝している。

わたしが、同和教育に必死になって取り組むようになった原因は、一人の教え子が差別によって殺されたからです。それはもう20年も前のことです。

ある夜、一人の教え子が私の家を尋ねてきた。彼は結婚して間もない頃だったのに、しょんぼりしてやってきた。そして、私に、「先生、私は中学校の頃、いい生徒でしたか。悪い生徒でしたか。」と尋ねる。その子は、友達が、「先生、あのなあ。」と言って私のところへ擦り寄ってくる。そんなようすを黙ってニコニコしながら見ているような子供でした。勉強の方は普通でした。掃除の時は、みんなが掃除をしなくても黙って掃除を続けてきた、そんな子供でした。

「君はよい子だったよ、君のしていたことは、眼を閉じると、今でも昨日のことのように思い出

す。」と答えると、彼は「ああ、そうですか。」と力のない返事をしながら、静かに、「ありがとうございました。」と言って帰って行った。

その教え子のようすが、心に引っ掛ってたまらない。そんな数日間を過ごした時、自殺したという報が私に入ってきた。結婚してしばらくたって、部落出身であることを暴かれ、生きる望みを失って死んだということだった。

私は、「しまった！……」と思った。私がもう一言、「どうしてなのか？」と聞いてさえいれば、死なずにすんだのではないかと思った。

また、もう一つ私がどうしても忘れることができないことは、その当時私は、その子とその子を取り巻くクラスの子供たちに部落問題を語っていなかった、同和教育をしていなかったことだ。私が、同和教育をしていなかったために、部落問題を語っていなかったために、一人の教え子の生命が奪われた。私が教え子を殺したんだという胸の痛みは、年ごとに大きくなっていった。このことがあってから同和教育は、生命なんだということを思い知らされた。

少年の頃の日々、世の中に対する反抗心をむらむらと燃え上がらせて、生きてきた私は、この教え子の死を境にして、同和教育に取り組む決意をした。同和教育に取り組む決意をした私は、その後、さまざまな理由をつけて、同和教育に反対する多くの人たちに出会った。しかし、私は決して負けなかった。部落差別が、人間の生命にかかわる問題であることを胸の痛みとして知っているから、決して負けなかった。私に同和教育反対などという人間によって、私の教え子が殺されたんだという怒りに震えて、私は徹底的にその人たちと闘ってきた。私は、今まで大切な教え子たちに、部落差別と闘って生きることを教えていなかった。そのために教え子を死なせてしまった。私は、それ以後、教え子と共に闘い、共に生きることを決意した。

これから難しい話をする。みなさんが難しい話は聞いてくれないと考えることは、みなさんを尊敬することにならないから、あえてその話を優しくつくりかえない。私が話す言葉を頭でなく、身体で聞いてください。頭で考えてもわからない。身体全体を耳にして、身体全体を眼にして、心で聞いてください。それでもわからない時は、身体に刻みつけてください。みなさんを信じるからこそ、尊敬するからこそ、難しい話をする。

人間というものはさまざまな差別と向かい合って、たとえ差別することがよくないと知っていても、よくないと知る知恵で、さらに巧妙な差別を考え出す。なぜ、人間はそんなことをするのか。それは、人を差別することは、自分自身を差別することになることに気づいていないからだ。この世の中から、部落差別がなくなった時、より幸せになれるのは、差別される人か、差別する人か、どちらだろうか。私は、差別する人こそ、より幸せになれると信じる。なぜなら、差別がなくなった時に、差別する人の中にある差別するという心の重荷がなくなるからだ。

私は、差別の中を生きる人々と共に生き、共に学んできた中で、人を傷つけることによって、人を傷つける差別によって、実は自分の生命を縮め、自分の魂を傷つけていることに気づいた。

そのことを一人の人間に例えて言う。頭で立っている人間も、頭で立っている私も、みなさんも、足に支えられていることを知らなければならない。

頭で人は立つだろうか。ある夜、死にたいという苦しみを抱いて、相談に来た一人の若者がいた。その時、若者に尋ねた。「死にたいと言っているのはどこか、どこが死にたいと言っているのか。」その時、若者はポカーンとした表情で私を見た。そこで私は手で頭をたたきながら、「死にたいと言っているのはここか。」と尋ねたら、若者はうなずいた。「頭の思いで死んだら、頭だけが死ぬか。」と、さらに続けて聞いた。

「頭だけの思いで死んだら手も死ぬでしょう。君は手に死んでもよいかと尋ねたか。」
「手だけではない、足にも相談しなくていいのですか。だいたい人間は頭でっかちだから、頭に近い顔の方ばかりを気にしている。」
「顔は、一日のうち何度も何度も気にして見る。だが、足の裏の方は、めったに見たことがない。足の裏を見る時は、水虫ができた時か、魚の目ができた時ぐらいだ。頭は足を無視している。しかし、足の裏は、全身の中で一番下で、主人にも感謝されないにもかかわらず、全身の重みを支えてくれている。」
「死ぬという一大事にいるのだから、せめて一度ぐらいは、足を見つめて感謝し、死んでもいいかと、了解を求めることぐらいしたらどうか。」
「足の裏を見つめ、足の裏よ、私は死にたいのだが、君は賛成か、反対かと聞いてみるんだ。」
足の裏が声を出して返事をしてくれることはない。しかし、足の裏にも知恵がある。それがなかったら、どうして主人に無視されながらも、全身の重みを支えて生きることができるだろうか。もし、足の裏が返事をしなかったら、それが聞こえるまで聞きなさい。それが人生なんだ。
つまり、頭の知恵だけで生きるのが人生ではなく、足の裏に気づき、足の裏に感謝できる本当の知恵を持つこと、それが人生なんだ。この話を、すぐに飲み込まないで、口にいっぱいためて、どんな味がするか味わってみて下さい。
私は、小学校の５年生の時、野球をしていて、友達と衝突して、右の足のお皿の下にある筋を切ってしまった。だから、私は、びっこです。小学校の５年生から、師範学校を卒業するまで、９年間、運動会が９回あった。運動会の度に、徒競走があるので、今年はサボってやろう、今年はサボってやろうと毎年思っていた。しかし、私は、いつも、ドッテンドッテンとびっこをひきながら、一番びりで、多くの人の前で、長い時間私の体をさらしながら生きてきた。９年間で９回の最後の運動会が済んだ時、「ああ、よかった。走り続けてよかった。」とこの頭がこの足に感謝した。これで私は日本一のびっこになれたと思った。私は、この頭の不注意のために足を傷つけてしまった。しかし、足は苦しいとも恥ずかしいとも言わないで、私の全身を支え、私の頭を支えてくれた。そのことに気付かない、この頭は、かってに恥ずかしいと、足を恨んだこともあった。
今、私は63歳、63年の人生を振り返るといろんなことがあった。私が悲しいこと、苦しいことに疲れ果てて、もうどうしようもない。そんな思いでいる時、私を励ましてくれたのは、差別の中を生きた人たちの魂だった。私は、いつも差別され、傷つけられてきた人たちの優しさと温かさに、支えられて生きてこれたように思う。
私の不自由な右足をかばうように、左足の太股は、右足の太股の倍近くある。左足の太股の太さは、怪我をしてから53年間、右足をかばいながら左足が生きて来た証拠である。
私は、右足についてまた一つ悲しい思い出がある。怪我をしてから、ちょうど１年、小学校６年生の体育の時間、不自由な右足が、跳び箱に引っ掛って、右の手首を折ってしまった。父は、心配して私を病院に連れて行ってくれた。ところが、その翌朝心配してくれた父が、心臓麻痺で突然死んでしまった。私は、あまりにも突然な父の死に、びっくりしてしまって涙も出なかった。父の通夜の晩、近所のおばさんが私の姿を見て、「この子が、怪我をしてお父さんがびっくりして死んだんやな。」と言った。私は、この言葉を聞いた時、私が父を殺したんだと思った。その言葉を聞いた時、いっぺんに悲しくなって、その夜は、まんじりともせずに泣き明かした。そして、翌朝、すでに会葬場では、私たち母子を迎えてくれる会葬者の列ができていた。両側に並ん

でいる列の前を私は、包帯で右手を吊り、左手で遺骨を抱いて歩き、母はその後、弟もその後にならんで通った。その時白いハンカチがちらちら見えた。白いハンカチで涙を押さえているおじさんやおばさんの「おお、可哀相になあ。」という声が聞こえた時、私は胸を張った。「昨日は何を言った。あんたが、おやじさんを殺したと言い、今日は、また可哀相やなあと言う。私は、決して可哀相な人間になりたくない。」と思った。父の遺体を運ぶ。その日の朝、母が、「お父さんが亡くなって、私たちの家は、お前が柱だ。お前が支えなんだ。」と言った。その母の言葉を思い出して、「なにが可哀相なんだ。可哀相な人間には、絶対になりたくない」と思った。

それから、母子４人は、口には言えない苦労の道を歩むことになる。ここに証拠がある。私は、ずっと、この頭で通してきた。山の小学校に赴任した時も、最後に鴨島一中に赴任した時も、私を知らない人は、この頭を見てニヤニヤする。私はその時、理由を言う必要も、下を向く必要もない。山の小学校に校長で赴任した時、私が散髪すると、子供たちが、「校長先生、きれいになった」と手をたたいて喜ぶ。なぜ、頭の毛を短くするのか理由はない。こうしたいからしている。

私が通っていた門司の小学校は、児童数1200人を越えていた。その1200人の中で私だけが髪をはやしていた。それは、父が元気な時、「坊ちゃん、坊ちゃん」と言われ、女中さんが二人も、三人もいる豊かな贅沢な暮らしをしていた証拠が、私に1200人いる子供の中で、一人だけ長い髪をさせていた。しかし、父が死んだのを境に、母親がバリカンで髪を切ってくれた。27歳の春まで母は、私の髪を切ってくれた。だから、この頭の中には、私の母がいる。私の父がいる。それを知らないで笑うものは笑え、人が笑ったからといって、ここにいる母や父を追い出したくはない。散髪にいく金がなかった。家でバリカンで刈られるのは痛い。今も、その痛さが懐かしい。

なぜ、そんな豊かな暮らしが、いっぺんにそんなに貧しくなったのか。私の父が築いてきた家。父はバナナの問屋をしていた。台湾から仕入れてきたバナナを九州から北海道まで売り捌いていた。しかし、父の死を境にして、33歳の母を女と思って、馬鹿にして男たちが何人も寄ってたかって、父の店を乗っ取ってしまった。その乗っ取った男たちの策謀に抵抗するため、母は父が死んで49日も経たないのに、私たちの暮らしを守るために、その男と父の位牌の前で大喧嘩をした。しかし、ついに乗っ取られてしまった。私は、働かなければならなくなった。父が元気な時、私の顔を見て「なあ、坊ちゃん」と言っていた男たちが、父が死んで店と家が乗っ取られると「このガキ」と言った。「坊ちゃんという言葉は、私という人間に対して言ったのではなかった。お金のためか。」私は、はっきりわかった。私は、母が大喧嘩をしているのを階段の下でずっと聞いていて「ようし、敵を取ってやる。」と思った。

学校はよく休み成績は落ちた。門司のところから海を渡れば、下関がある。そこに市場がある。私たち親子は、小さな果物の店をしていくために、売る果物を小学校６年生の私が、朝、暗いうちに海を渡って仕入れてきては、店において学校へ行った。母が、体が弱かったため、どうしても学校を休まなければ、店番ができない日もあった。食べるものがない時もあった。そんな私を見て母は「すまんな。」と言った。私は、母が心配してくれるその気持ちがよくわかったから、「ぼくは、もう中学校（旧制中学校）へ行くのはやめるから。」と言った。楽しみにしていた中学校への進学をやめて、高等小学校の二年間の道を選んだ。そんな私を見て母は「中学校へ行かないのだから、しっかり勉強しなよ。」と言って、私に、大人たち、青年たちが、私の学校で夜、勉強している夜学へ行かせてくれた。寒いある夜、母は、乏しい母の財布の中から、お金を出して「おなかが空くだろうから、帰りに焼き芋でも食べて帰り。」と言って、お金をくれた。私は、その夜の帰り焼き芋を買って弟たちに食べさせようと思って、懐に焼き芋をいれ走って帰った。

学校を休むことが多くなった。豊かな家で長髪にしていた頃の友達は、勉強がよくできる子、家がお金持ちの子だけだったが、私の生活が、苦しく貧しくなってくると、貧しい家の子、勉強が遅れている子、いつも先生に怒られて立たされている子が、私の友達になった。私は小さい頃から、家が貧乏で先生からよく叱られる子供たちの中に、本当の人間らしさがあることを身をもって知った。

家の仕事のために、学校を休むことが多かった。それは仕方のないことだった。しかし、月に一回だけその日が学校にいける日であるにもかかわらず、どうしても行きたくない日があった。それは、学校へお金を持っていかなければならない日だった。行きたくなくても休むわけにはいかない。前の日の夜、私は何と言い訳しようかと苦しかった。私は、いつも「忘れました。」と言い訳した。一番うまい返答だった。そう言ったら、友達が横で「お前、ようわっせるのお。」と言いだし、また「今度も忘れるんだろう。」とも言った。けれども、先生は一言もそんなことは言わなかった。そして、何ヶ月か後の放課後、私を呼んで言った。「貧乏が恥ずかしいのか。貧乏を恥ずかしがることが恥ずかしいのか。」と聞いた。「貧乏が恥ずかしいのではない。貧乏を恥ずかしがることが恥ずかしいのだ。お前のお母さんはどうやって生きてきたのか。」と言って、こんこんと私に話をしてくれた。

ある日のこと、母が夜寝ずに作ってくれた手製のズボンをはいて学校へ行った。もちろん、格好は悪い。小学校6年のクラスの子供が笑った。私は、腹がたってたまらないでその友達を殴りとばした。私は、63年間の長い人生の中で、人を殴ったのは、それが最初で最後であった。殴って、殴って殴り倒した。いくら、殴っても私の心は晴れなかった。ふと、気がつくとたくさんの友達が、ぐるっと私を取り囲んで、冷たい目で私をじろっと見た。その時、私はいっぺんに身体中の血が抜けてしまった。それがどうしてなのかわからなかった。

教師になって、部落問題を勉強し、水平社宣言を学んだ時、そのことが初めてわかった。自分が人を傷つけようとしたって、人は傷つけられることはない。人が私を傷つけても私は傷つかない。このことが、今までわからなかった。貧乏が恥ずかしいと考えていた私が、いくらお前は貧乏だと言われて馬鹿にされても、私はそのことによって、傷つけられることはないのだということを教えてくれたのは、部落問題の勉強だった。差別の中を胸はって生きる人々の姿だった。水平社宣言だった。

小学校6年生の先生は、酒井虎蔵と言った。その先生が、小学校を卒業する時、「100人のうち、99人走っても、たった一人お前は走るなよ」と言われた。その言葉を胸に私は、小学校を卒業した。その言葉を心の支えにして、私は一生懸命今まで生きてきた。小学校6年生から半分ぐらいの人が、中学校にいく。私は高等小学校にいった。私の高等小学校の仲間が、「ほれ見てみい。中学校にいっている人間は、偉そうにしている。帰りに待ち伏せてやったろうか。」という声が聞こえた。私は止めた。「情けないことをするな、相手を待ち伏せて殴って、自分が傷つくということに気がつかんのか。」私は必死に止めた。友達は私の言うことをわかってくれて、そのことはしなかった。高等1年生の時の先生は、滝本章夫という先生だった。私が先生になろうと思ったのは、その先生との別れの時だった。いろいろと事情があって、母親の里の徳島へ帰るようになった。母が先生に、「お世話になりました。徳島の鴨島へ帰ります。」と別れを告げた時、先生は私の母にこう言った。「おかあさん、私には子供がないのでよかったら、この子を預からせてもらえませんか。うちで預かって、この子を先生にしたらどうですか。」と言ってくれた。私の母が、そんなことをすることはなかった。けれども、そんなことを言ってくれた先生の

温かい心は、決して忘れることができない。私はその先生の言葉を大事にして、自分が先生になる決心をしたように思う。

私たち兄弟は、母子家庭で貧しい暮らしにあるということで、世間から冷たい目で見られるということが度々あった。その度に、母は、世間の冷たい仕打に傷つきながらも、羽を広げて私たちを守ってくれた。そんな姿を見た時、私は母を虐めるような人間は絶対に許さないと思った。

私は、私の教え子、部落出身の教え子たちに、私が持ってきた私の母に対する思いを言い続けてきた。部落に生まれたことを恥ずかしがって、親を傷つけてはいけないということを私は、必死の思いで言い続けてきた。「私がしてきた苦労と、部落に生まれた君たちのお父さんやお母さんがしてきた苦労を比べたら、月とスッポンぐらいの差がある。私が母子家庭と貧しさの中で育って苦しい思いをしてきた。その何十倍もの苦しみを背負って、君たちを育ててきたことを忘れるな。」と言って子供たちを励ました。

私は、世間を憎みながら、世間に反抗しながら、生きてきたのだが、やけを起こさなかった。なぜかと言うと、それは先生の温かい教えがあったからだ。それに、もう一つ、父が生存中大事にしてきた貧しい人々の優しさに支えられたからだ。父は、本当に心優しい人だった。バナナは、店先で売るやり方と、天秤棒を担いで売り歩くやり方と二つあった。天秤棒を担いで売る人は貧しい人が多い。バナナを買いに来ても、付け根のところが黒くなって、ポロッと落ちる一番おいしいバナナ、けれども商品としては安い、そんなバナナを買っては、町を売り歩く。そのおじさんやおばさんたちに対して、父は「お金はいつでもいいよ。いいから持っておいき」と言っていた。私が店へ遊びにいくと、父はまだ物事のわからないような私を呼んで、「神様は、みすぼらしい姿に形を変えて、人間をためしにくるんぞ。」と言って、私によく話を聞かせてくれた。その貧しい暮らしの中に生きる人たちは、父が死んだ時、真っ先に私たちのところへ来てくれて、お父さんが生きておった時に借りたお金は、まだわずかしか返すことができないと頭を下げ、いろんなものを持ってきて、私たちを励まし支えてくれた。お金のある人は、もっとお金を増やそうと思って、母が一人でやっていこうとする店を乗っ取ってしまった。貧しい人たちは、「すまん。」と言って「ささやかですが……。」と言って、私たち親子に食べ物を持ってきてくれた。私は、冷たい世間を憎み世間に反抗しながらも、やけを起こさなかったのは、貧しい人たちの温かさがあったからだと心から感謝している。

私は、人を差別するような人間にはなりたくない。そのためには、どのような生き方をすればよいのか。私が、不自由な右足と生きてきたように、差別の中を生きる人々と共に、苦しみながら生きることが、私の生きる道だと思った。

鴨島第一中学校にいた時、部落差別のさまざまな苦しみ悲しみにあえいでいる子供を見て、何とか代わってやりたいと思った。しかし、私が代わってやることはできない。それならば、私の残された道は、、その子供たちや親たちといっしょに苦しみながら、生きていくことしかない。私は、曲りなりにも、今日まで人間らしく生きたいということを目標に生きてこれた。それは、世の中の間違いと闘うことを自分の生きる証としてきたからだ。そんな暮らしの中で、独りぼっちになったこともあった。その時、しょげ返って、その独りぼっちの孤独感にあえいでいた時、亡くなった母がこう言った。「独りぼっちになることがいやだったらやめ。やめたらいいでないか。」と母が言って、その次に「独りぼっちになっているということは、お前が真実の道を生きているという証拠でないか。」と言って、私を叱りつけてくれたこともあった。

私は、人間らしく生きる。間違いを正しながら生きる。たった一人になってもその生き方の方

がいい、そんな生き方がしたい。これが私の同和教育の喜びです。私は、私の大切にしている作品を私からのメッセージとして、みなさんに送ります。

「自分以下を求める心」

あれは、小学校２年生のことです。私たちのクラスに、よくいじめられる女の子がいました。私も、他の人たちと一緒に、いじめては笑っていました。その頃の私の気持ちは、「自分以下の存在が欲しかった」のだと、今になって気づきます。あの時のあの子が、もし自分だったらと思うと、今までいじめた人に対して、あやまらなくてはなりません。

自分をみがく努力もしないで、ただ自分以下がほしいだけでいじめるのは、やっぱり差別ですね。部落差別やいろいろの差別について、たくさんのことを勉強してきた私ですが、実際の生活ではそれをまるで生かしていませんでした。なんか今、考えてみると、「なぜあの時、あんなことをしたんだろう」と思ってしまいます。

思っているだけ、悪いと知っているだけでは、すぐポロッと言ってしまって相手を傷つけたり、がっかりさせたりしてしまいます。

どうして私はこうなんだろう。やっぱり、自分以下がほしいという気持ちが心の底にあって、それが作用しているのでしょうか。

私は、自分以下がいらない人間になりたいです。そのために自分の生活にまじめにぶつからなくてはなりません。こう考えてくると、ひとのことを、とやかくいわない生き方は大切なことなんですね。立派な人の証明なんですね。身のまわりを見ても、努力しない人ほど、他人を傷つけたり、とやかく言ったりしています。まるで魅力のない生き方ですね。その中に私もいるかと思うと、恥ずかしくなります。

自分以下などいらない生き方をつかむことが差別やいじめをなくすことだと、だんだんわかってきました。

学校でやっている「自分新聞」や「生活の記録」、これなども、何枚も何冊も挑戦している人は、他人のことなどイヤミをいっている暇はないですからね。

「今の自分以上をめざす」そのために全力で生きる。他人のことをとやかく言わないんだから、ほんとうに仲間として力が合わせられる。すてきなことですね。

私たちは、得意もあれば不得意もあります。すべてをかっこよくやることはできません。だのに、人の小さな欠点を探し出して、いじめたり、自分をすぐれていると思い違いするのは、恥ずかしいことですね。ねっ先生、とっても恥ずかしいことですね。

私は今まで、人間として恥ずかしい生き方をしてきたのです。何べんも、何べんも、まちがったことをしました。だから、他の人が私をいじめた時、そのまちがいがはっきりわからなかったのです。

※本資料は佐藤文彦先生が、徳島県中学校同和教育研究大会に向けて、部落問題学習に取り組んでいた阿波中学校の全校生徒に話をされた内容であり、「美しさを求めて生きる人生を」は、１９８８年元旦に佐藤先生からいただいた年賀状に記されていた言葉である。

１９９２年度第３学年第１回全体学習・公開授業の記録（板野中学校３年Ｂ組）

主　　題　「人間としての生き方を求めて」　　１９９２年５月２７日（水）

資　　料　「美しさを求めて生きる人生を」（佐藤文彦）　　授業者　森口健司

Ｔ１：初めての全体学習ということで、緊張している人もいると思うけど、頑張って互いの思いを語り合って、みんなの差別解消への熱い思いをより確かなものにしていきたいと思います。悲しいかな部落差別は厳然と存在しています。その差別をなくしていくことが我々に課せられた仕事であり、そういう生き方をしていくことが人間として本当の喜びをつかんでいくことになっていくと考えます。一緒にこの問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。３年生の第１回目の全体学習、その資料として、「美しさを求めて生きる人生を」という資料を学んできました。この資料、みんないろいろと思いを込めて読んでくれたと思います。この資料に寄せるみんなの思いを語り合う１時間にしていきたいと思います。この資料の中に次のような一節があります。「私が同和教育をしていなかったために、一人の生徒の生命が奪われた。部落差別と闘って生きることを教えていなかったために、教え子を死なせてしまった」とあります。そして「同和教育は生命なんだ」と記されています。この「同和教育は生命なんだ」ということについて、みんなが思うことを語り合いたいと思います。

TO(女)私は同和教育を受けることによっていろんなことを知る中で、間違いや正しいことがわかってきて、間違いを正していけるようになるんだと思います。それに同和教育を受けてきて思ったのは、いろんな人の気持ちが少しでも理解できて、それを知って差別をなくしていこうと本当に思えるようになってきました。そう思えるようになったことが、私に生きていく勇気をくれたと思います。

KK(男)同和教育によって部落差別はなくなっていき、部落差別によって傷ついたり、死んでいく人がなくなっていくと思います。もし、同和教育がなかったら、差別によって傷つく人が多くなっていくので、同和教育は絶対なくてはならないものだと思います。

SK(女)私は今まで同和教育をするから余計に差別をするようになってしまうのではないだろうか。差別があることを教えずに、放っておけば自然に差別は消えていくのではないだろうかと思っていた時がありました。でもこの佐藤先生の話や、森口先生の話を聞いて考えてみるとそれは違うんだ。間違っているんだということに気がつきました。同和教育を勉強していなかったら、実際に差別を受けた時、友だちにも他の信頼する人にも、今耐えられない思いをしていることを打ち明けて相談することもできないと思います。でも、同和教育をしていたら、友だちに打ち明けることができて、友だちが心の支えになってくれて自分は差別に耐えられると思います。

Ｔ２：同和教育をしていたら友だちにその思いを打ち明けることができて、いろいろ厳しいことがあっても頑張っていくことができるというＫさんの発言がありました。今の発言に関わって意見が聞きたいです。

SN(男)僕はＫさんの意見を聞いて、本当の気持ちを打ち明けることのできる仲間をつくっていく意味においても、しっかりと部落問題学習をつみ上げていかなければいけないと思います。僕は前までは口先だけで差別はあかんと言っていたけど、今のＫさんの言葉を聞いて、ほんまに同和教育はちゃんとやっていかなければいけないと思いました。

HM(男)僕もＫさんの意見と同じように、部落差別というものは努力してなくしていかなければならないものだと思いました。やっぱり、みんなで協力して部落差別をなくしていくということ

が大切なんだと思います。

TO(女)私はもし自分が部落差別を受け、友だちに話をしてわかってくれんかったらつらいと思います。だから誰かが悩んだ時みんなが友だちとしてちゃんとわかってあげることができるように、同和教育を真剣にやっていかなければいけないと思います。

Ｔ ３：今の発言どう思いますか。

YI(男)僕も差別はみんなが協力しなければなくならないと思うし、差別をなくすためにみんなで頑張ることによって、差別は本当になくなっていくものだと思います。

Ｔ ４：Ｋさんの発言、もう一度みんなでじっくりと考えてみたいと思います。ＳＫさんもう一度繰り返してみてください。

SK(女)同和教育を学んでいなかったら、実際に差別を受けた時、友だちにも、他の信頼する人にも、今、差別を受けて耐えられない苦しい気持ちを打ち明けることができないけど、同和教育をしていたら友だちに今思っていることを打ち明けることができて、心の支えになってもらうことができて、自分は差別に耐えられるというか、差別をなくすために闘っていくこともできるということです。

Ｔ ５：「同和教育をしていたら差別にあったときのその思いを友だちに打ち明けることができる」ということについて、この全体学習の取り組みもそんな願いがあるんです。私たちは毎日の生活の中で、なんとなくという人がいるかもしれないし、親からはっきりと言われた経験のある人もいるだろうけど、どの子とどの子が部落の子であるかということ、板野町のどのあたりが部落であるということもほとんどの子が知っている。にもかかわらず、毎日そんなことを知っておりながら生活しているにもかかわらず、毎日の生活の中では常に差し障りのない話しかしていかない。この問題に関わって本当に思っていることを言い合うことはほとんどない。差し障りのない表面的な楽しいことしか話をしない。同和教育というのは一人一人が部落差別に関わって、部落問題に関わってこんな気持ちでいる、こんな気持ちを持っているという部分を語り合い分かち合い、共に差別をなくしていこうとする生き方をつかんでいくものだと思うんです。そんな授業がなかったら、そんな学習がなかったら、いつかみんながばらばらになってどこかで巡り会った時、そしてこの問題に関わって苦しい思いを味わった時、この問題に関わる本当の思いを語り合うことはできないと思う。今この中学の３年という時代をみんなで大切にしたいと思う。我々は本当の思いをぶつけ合った。この仲間には自分の本当の思いを打ち明けることができたんだ。そんな関係をつくっていく授業にしたいと思う。今のＫさんの意見に関わってみんなの思いをつなげてほしいと思います。

TH(男)部落問題と闘うということをしなければ、この問題を解決することはできないと思います。それにみんなで頑張らなければ、一人の頑張りでは決して解決していく問題ではないと思います。だから、同和教育によって心から話し合える友だちをつくって、みんなで協力していかなければならないと思います。

TS(女)私もＫさんと同じで、同和教育をしていなかったらこの問題に関わって本当に話し合える友だちもできないと思うし、差別は現実にあるし、差別をなくしていくためにみんなで頑張っていくという意味においても、同和教育はとても大切だと思います。

YO(女)もし部落問題を教えていたら、一人の教え子の生命を失うことはなかったかもしれない。差別と闘うということがしっかりと同和教育を通してつかむことができていたら、死ぬということは頭に出てこなかったと思います。

TO(男)今も部落差別で苦しんでいる人はたくさんいると思うし、差別のために傷ついたり、生命を落とす人もいると思います。だから同和教育を受けて僕たちは差別と闘うことを学んでいかなければいけないと思います。

T 6：闘うことができたならば、生命を落とすことはない。生命を奪われることはない。そして、もう一つこう思います。「負けることはない。闘うことを知ったら、絶対に負けることはない」と思います。立ち上がったら仲間が生まれます。仲間と共に闘うことを知ったならば、絶対に負けることはない。そんな信念が私の中にこの学習を通して生まれてきました。訴えることにより道は開けていきます。一人が語るそれにつなげて語る。その中で本当の仲間ができていく。そんな思いでいます。この資料には佐藤先生が、先生自身の生き方を通して部落差別をなくしていく生き方をみんな自身の生き方にしてほしいという願いが切々と記されています。佐藤先生は、少年の頃先生のお父さんがなくなられた時、こう言われています。ちょうど佐藤先生は腕の骨を折って包帯をしていた。その姿を見て近所のおばさんは「この子が怪我をしてお父さんがびっくりして死んだんやな」と言った。その言葉が物凄くショックだったと言われます。そのおばさんが翌日のお葬式の時には、「おお可哀相に」と涙を流してくれた。その中で、佐藤先生はお母さんのお前がこれから家の柱なんだという言葉を思い出して、「何が可哀相なんだ。可哀相な人間には絶対なりたくない」と思ったと言われます。可哀相な人間には絶対なりたくないと思った佐藤先生。この佐藤先生の思いをみんなはどう感じましたか。みんなはどう受け取りましたか。いろいろ思うことをつなげてほしいと思います。

TO(女)可哀相という言葉の奥にある人を見下したような部分に怒りがこみ上げてきたんだと思います。可哀相という言葉の中には、自分でなくてよかったと思ったり、自分でなくてほっとしたという感じも受け取れたんだと思います。自分より下と見る、同等に見ていかない部分を佐藤先生は否定しているんだと思います。

T 7：可哀相という言葉の奥には、自分でなくてよかったという思いがあるということかな。

SK(女)人に可哀相というのは自分より一段下に人をおいて、「君は不幸だ」と言っているのと同じような感じがします。本当は人はどんなつらい思いをしても可哀相にはならないと思います。そのつらい思いをする中にも、ささやかな幸せや喜びや生きがいを見つけて生きていくことができると思います。

TO(男)僕も可哀相というのは自分より下を見ている言葉だと思います。それに自分でなくてよかったという思いが、可哀相という言葉の意味に入っていると思います。だから佐藤先生は否定したんだと思います。

HM(男)可哀相という言葉の中には、あれが自分でなくてよかったという意味が含まれていると思います。水平社宣言に「人間は可哀相と憐れむものではない」という言葉があるように、昨日は「この子が怪我をしてびっくりして死んだんなあ」と悲しみのどん底に落としていくようなことを言い、その翌日は「可哀相、可哀相」というように自分勝手に人を憐れんだりすることは、その人を自分より下に見ていることになるんだと思います。

T 8：この前の社会科の時間に話をした「水平社宣言」のことと重ねてM君が言ってくれたんですけど、今のM君の発言に付け加えてないでしょうか。

AO(男)人は変に可哀相などと憐れまれると、本当に惨めになっていくと思います。佐藤先生はそんな惨めさに打ち勝って、強く生きていかなければと思ったんだと思います。

KM(女)私も水平社宣言にあるように、人間は本来尊敬すべきものであり、可哀相だなんて憐れん

だりするのは、本当におかしいことだと思います。また、可哀相だなんて思われる人間にはなりたくないと佐藤先生は思ったんだと思います。

YI(男)僕も可哀相という中には、自分はその人より上だとか、自分でなくてよかったという見下した考えがあると思います。やっぱり人間というのはだれが上だ、だれが下だというのでなくて、みんなが同じでみんなが人間として尊敬し合って、認め合うことが大切だと思います。

T 9：人間は憐れんだり、踏みつけたりするものではない。人間とは元来尊敬し合うべきものなんだ。水平社宣言の中心の部分です。そして、佐藤先生はこう言われていますね。「水平社宣言を学んだ時、自分が人を傷つけようとしたって、人は傷つけられることはない。人が自分を傷つけても私は傷つかないことに気付いた。」もう一度言います。「水平社宣言を学んだ時、自分が人を傷つけようとしたって、人は傷つけられることはない。人が自分を傷つけても私は傷つかないことに気付いた。」そして、こう結ばれています。「部落に生まれたことを恥ずかしがって、親を傷つけてはいけない。」そのことを佐藤先生は差別の中を胸張って生きる人々の姿や、水平社宣言から学ぶことができたと言われます。佐藤先生が学び取ったこと、水平社宣言や差別の中を胸張って生きる人の中から学び取ったことはどういうことだったんだろう。みんななりに捉えた部分を発表してください。

HI(男)差別の中を胸張って生きる姿は、本当にすごいものだと思います。そのすばらしさを私たちは、しっかりと受け止めていかなければいけないと思います。

YB(男)部落を恥ずかしがるということは、同じ部落に生まれて差別をなくすために必死に頑張っている人たちの心を否定することになることを佐藤先生は訴えているように思います。僕も差別をなくすために頑張っている人たちに連帯していくことのできる人間になりたいです。

TN(男)だれかを差別すると、今度はだれかに差別されるようになってしまうと思います。差別をしなくなると差別で悩む人もいなくなるし、差別をする人もいなくなるので、差別を絶対なくさなければならないことを佐藤先生は、学び取ったんだと思います。

SN(男)佐藤先生は人間らしく生きることを学ばれたんだと思います。水平社宣言には、人間は憐れむものでもなく、踏みつけるものでもない。人間とは元来尊敬すべきものだとあります。尊敬し合いながら生きていくことが、人間本来の生き方であることを佐藤先生は訴えられているんだと思います。

NM(男)人を傷つけようと思っても逆に自分が傷ついてしまったり、関係のない人までも巻き込んでしまったりすることがあると思います。人を傷つけて安心するのではなく胸張って頑張って生きれば、本当の幸せが見えてくると思います。部落に生まれたことを恥ずかしがって親を傷つけてはいけないということは、ひとり苦しむのではなく、多くの仲間と連帯して共に頑張っていくことが大切なんだと僕は思いました。

YT(女)人間は踏みつけるものではなく、可哀相と憐れむものでもない。人間は尊敬するものだと水平社宣言に表わされているのように、部落に生まれたということは決して恥ずかしがることではないと思います。差別されることが恥ずかしいのではなく、差別することが恥ずかしいのだと思います。

T10：みんなに聞きたい。今、Tさんが「差別されることが恥ずかしいのではなく、差別することが恥ずかしいのだ」と言ってくれた。何人かの人がうなずいていた。みんなほんまにそう思っているのだろうか。私は部落に生まれたけど、僕は部落に生まれたけど、そのことが決して恥ずかしくないと言い切れるだろうか。私は部落に生まれなかった、僕は部落に生まれなかっ

た。部落の人は可哀相だ。僕はその可哀相な部落の人間でなくてよかった。そんな思いはみんなの中にないだろうか。みんなはどう思っていますか。

TO(男)そんなのは関係ないと思います。どこに生まれようと同じ人間だから、そんなことをとやかく思うのではなく、人間として何が大切かを考えて生きていきたいと思います。

T11：つなげてください。本当の思いを語り合いましょう。

HM(男)僕も部落に生まれからといって恥ずかしがることはないと思います。僕たちが部落の人たちを可哀相だとかいうのは、逆にその人たちを差別していることになると思います。部落の人たちも自分たちも同じ人間だと思う心を持つことが大切だと思います。

KF(女)人は自分の生まれのことについても、自分がその生まれたところを恥ずかしがっていなければ、自分が傷つくこともないと思います。

KK(男)たとえ部落に生まれたといっても周りの人間とは変わりのない人間なんだから、その人を蔑むように見ていたら、自分の心も悪くしていくことになると思います。

TO(女)私は部落に生まれて、初めてそのことを知った時は、差別されたらどうしようと思っていたけど、ずっと勉強してきて、もし差別を受けることがあっても自分さえ間違っていなかったら、何も恐れることはないと思うようになってきました。部落の人が、私が最初に思っていたように悩んだりするのはおかしいと思うようになって、私は部落に生まれたことは恥ずかしいことではないと思うようになってきました。

T12：この学習を積み上げていく中から、そんな思いがこみ上げてきたということかな。

YI(男)僕も部落に生まれた生まれてないということは関係ないと思うし、そんなんで人間の価値は決まらないし、そんなことでその人を見下した考えで見たりするのはおかしいと思います。

T13：Oさんや I 君の思いを本当の思いでつなげてほしいと思います。

SK(女)部落に生まれたことをこだわって避けていくのではなしに、本当の友だちだからこそ、そのことを本当に話し合いたいと思います。

T14：本当の友だちだから、部落のことを避けたりするのでなく、そのことを本当に話し合いたいというKさんの意見につなげてください。

HM(男)僕もKさんと同じように、やっぱり部落差別をなくしていくということは、みんなで協力して頑張っていくということになります。だから僕たちももっともっと部落問題学習をしていくことによって、みんなと結束を固めていって差別をなくしていけたらいいなあと思います。

AO(男)僕は部落に生まれたとしても気にせず、恥ずかしがることなく生きていけばいいと思うし、もっと僕らが部落問題を勉強して、差別をなくしていきたいと思います。

T15：ここに３年生１９６名が集まった意味は本当の思いを言って、本当の思いを語り合って、絶対に差別をなくしていくんだという思いをみんなで励まし合ってより確かなものにしていくことだと思う。みんなはやがて進学就職という時期を迎える。そして、この１９６名をそれぞれの進路に別れていくだろう。みんながそれぞれの道を歩み出しても、共に差別解消に向けて闘い続けるんだという堅い絆をつくるためにこの学習があるんです。そのためにも、みんなの心の底にある思いをしっかりと語り合っていきたいと思うんです。佐藤先生は、講演の最後にこう言われています。「世の中の間違いと闘い続けることを自分の生きる証としてきた。そして、人間らしく生きる。間違いを正しながら生きる。これが同和教育の喜びです。」もう一度言います。胸に刻んでください。「世の中の間違いと闘い続けることを自分の生きる証としてきた。そして、人間らしく生きる。間違いを正しながら生きる。これが同和教育の喜びです。」

この同和教育の喜びという言葉、みんなの中にどう響きましたか。佐藤先生の生き方から、同和教育の喜びという言葉、みんなはどう受け止めましたか。みんな自身がこの言葉に寄せて思うことをあと残された時間、語り合いたいと思います。

TT(男)差別をなくしていく一歩を僕らが踏み出すことによって、その思いがしっかりと受け継がれていき、僕たちのあとに続く人たちの中には差別がなくなっていく。それが同和教育の喜びだと思います。

MT(女)部落問題について学ぶことによって、お互いの思いをわかり合うことができ、本当の仲間ができていくと思います。それは部落の人たちにとって大きな喜びになっていきます。

TS(女)同和教育をしていく中で差別する人も差別される人も、差別がなくなることによって喜びに変わっていくと思います。

MI(女)同和教育をしたことによって少しでも差別がなくなっていくことが喜びだと思います。

YO(女)差別をなくしたいと願っている人と、差別をしている人、その人たち全体の平和を取り戻すために、この同和教育をして何でも言い合える友だちをつくっていくことが、同和教育の喜びだと思います。

MF(女)私も同和教育で何でも言い合える友だちができていくと思います。そしてその友だちは私の心の支えになってくれると思います。そんな友だちができること、それが同和教育の喜びだと思います。

T16：同和教育をすることによって、本当のこと、本当の思い、何でも言い合える友だちができる。それが心の支えになっていく。それが同和教育の喜びではないだろうかというFさんの意見、みんなつなげてください。

TM(男)僕にはまだ同和教育の喜びというものは余りわかっていないような気がします。同和教育と聞くと「いやだ」「しんだい」という気持ちがあります。この気持ちをこれからの部落問題学習で喜びに変えていきたいと思います。

YT(男)僕たちが先頭に立って差別をなくしていったら、他の人たちも力を合わせてあとから差別をなくしてくれると思うので、僕たちが先に立って差別をなくしていきたいです。そんな生き方が僕たちに大きな喜びをくれると思います。

SK(男)差別をなくすことによって、いろんな人たちが幸せになっていくから、その人たちを一人でも多くつくっていくことが、同和教育の喜びだと思います。

KS(女)多くの人が同和教育を学んで、差別をなくしていく苦しみが喜びに変わることが同和教育の喜びだと思います。

TM(女)私にとって同和教育の喜びとは、本音で話し合うことができることだと思います。これからはそんな仲間を増やし、佐藤先生のように世の中の間違いと闘うことを自分の生きる証としていくことができる。そんな生き方がしたいです。

HM(男)同和教育の喜びとは、部落差別のことを勉強して差別をなくしていくということで、本当に人間らしい生き方ができることだと思います。僕はまだまだ勉強が足らないので、もっと勉強して同和教育の喜びというものをもっと大きなものにしていきたいと思います。

AO(男)佐藤先生の同和教育に対する意気込みや取り組む姿勢が今も熱いものとなって伝わってきそうな感じがしています。そして、佐藤先生の言葉の一つ一つには、一刻も早く差別をなくしていこうという思いがみなぎっていると思います。僕はこの力を受けて頑張って同和教育に取り組んでいきたいです。そして、みんなで同和教育に取り組んだという喜びをみんなでつかみ

たいと思います。

YI(男)僕の意見や３Ｂ全体の意見が、３年生の子全員に聞いてもらえてよかったと思うし、また他のクラスに全体学習が回った時も、みんなが本音で話ができたらすばらしいと思います。

TO(女)私たち３Ｂがこの授業をして、私も発表したけど私たちの意見を聞いて友だちがほんまにわかってくれたかなあと思うし、この授業を通してみんなが私たちの気持ちをわかってくれたらいいなあと思います。

Ｔ17：今のＯさんの意見を聞いてみんなはどう思いましたか。学習会のクリスマス会の時に、今高校２年で頑張っている子と、Ｏさんがこんな話をしてくれたんです。「みんなにわかってもらいたい気持ちはいっぱいある。でもそれを言うたら、いい格好するなとか、ブリッ子しよるんとちがうんとか言われる。歌を歌う時も、頑張って声を出したら、ちょっかいかけてくる。」正しいことをしっかりとやっていく仲間、一生懸命頑張っている仲間、そんな仲間をちゃかしたり馬鹿にしたりする空気が絶対あってはならんと思う。この問題は私たち自身がどう生きていくかということが問われている。私たちの生活の中で仲間を踏みつけたり、傷つけたりする。そういったことが決してない。そして本当によりよく生きることができる。仲間を支え、仲間を励まし合って、本当の思いを語っていくことができる。そういう授業を、そういう関係をみんなと共に築き上げたい。共に支え合いながら、今日も学校にきてよかったとしみじみ思えるような関係になっていきたい。そしてみんなといつか立派な別れがしたい。卒業という大きな峠が何ヶ月か先にやってくる。その時に私たちが出会えてよかった。この学習をしてよかった。そして、みんなと築き上げたものを大切に守り、より確かなものへと築き上げていくんだというものを持って頑張っていきたい。そんな思いでこの学習を積み上げていきたいと思います。次の時間全体で話し合いたいと思います。３年Ｂ組の授業は、これで終わります。

佐藤先生宅を訪れて　1991年８月

佐藤先生（前・中央）と京都を訪れる